

## 加藤久和先生

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼清, 弘之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/8204">http://hdl.handle.net/10291/8204</a>

## 加藤 久和先生

「シャジンケン」という耳慣れない言葉を聞いて、はて何のことかと訝ったのは、ついこのあいだのことのようにも思えるが、かなり昔の話である。たいていの人には、今でも何のことかわからない、奇妙な名前である。

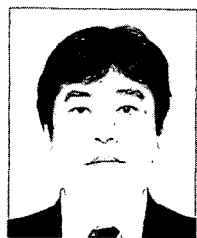
この奇妙な名前は「社人研」と書き、そのフルネームは「国立社会保障・人口問題研究所」である。行政改革の嵐がおこった時期に、社会保障研究所と人口問題研究所が合併してできた国立の研究所である。

私は商売柄、両方の研究所に出入りしていたが、二つの研究所の合併話を聞いて、何かしっくりしないものを感じたのであった。しかしながら、合併を強行した人たちは、先見の明があったといえる。

現在、わが国の社会保障政策の重大な課題のひとつ

が、年金制度の改革である。急速に進む少子高齢化によって、年金を受給する高齢者が急増し年金保険料を負担する若い人が減ることになり、わが国の年金財政は危機に瀕している。本格的な高齢化社会の到来を目前にして、介護保険を頑健な制度に育て上げることも重要な課題である。このように、わが国の社会保障問題は人口問題を抜きにしては論じられないものになっている。

加藤久和さんは国立社会保障・人口問題研究所の社会保障基礎理論研究部第一室長として、わが国の社会保障研究の第一線で活躍してこられた方であるが、本年度から政経学部に来ていただくことになった。第一線で活躍する研究者であることには変わりないが、教育者という大変な役割が追加されたのである。



しかし加藤さんは、大変なところか学生に教えるのは楽しいし、明治大学は子供のころから好きだったという。小学生のころ、父親につれられて三省堂に行く途中明治大学の校舎を見上げて、大学にあこがれたところである。御茶ノ水界限にまだ高いビルのなかったころ、現在の明大スクエアの所に聳えていた白亜の大学院は、加藤少年の目に強い印象をのこしたのであらう。

高校生のころに漠然とながら研究者への道を夢みたという加藤さんが進学したのは慶應義塾大学の経済学部であった。卒業後、住宅金融公庫に就職されたが、経済学研究への熱意は抑えがなかったようで、サラリーマン生活数年をへて筑波大学の大学院に進まれた。念願かなって研究職に就いた加藤さんは、いくつかの大学で非常勤講師の経験も積んでこられた。

さて、加藤さんの研究には、一般の人も興味を抱くさまざまな問題がある。厚生年金の受給と負担のバランスをシミュレーションして、トクをするのは一九五六年以前に生まれた世代であり、その後生まれた世代は厚生年金でソンをすることを指摘された。

3年ほど前、リバティホールで行われた「結婚の人

口学——非婚・離婚はどこまで増えるか」というシンポジウムで、加藤さんは非婚と離婚に関する計量分析の研究報告をされた。非婚や離婚の研究も、社会保障研究の縄張りに入るのである。年金財政破綻の原因が高齢化であり、高齢化の原因が少子化であり、少子化の主な原因が非婚化だからである。

このように、加藤さんの仕事は広い領域にわたる社会保障の理論的および実証的研究である。

最近の研究についてうかがったところ、国民負担と経済成長の国際比較、女子就業と少子化の時系列分析、さらには社会保障財政を組み込んだマクロ計量モデルなど、さまざまな難題に取り組んでおられるとのことである。

相変わらずの精力的な研究活動には敬意を表すが、頭の健康のために居酒屋での放談会にも誘う必要があると感じている。そして、体の健康のためにビールをやめて、カロリーも低くプリン体も少ない焼酎に変更されるよう勧告したいと思っている。

兼清 弘之